
 □書 評□

日赤中央血液センター副所長 徳永 栄一 著

輸 血 検 査 (日常検査法シリーズ)

東京医科歯科大学輸血部 安 藤 清 平

輸血検査は患者の生命に直接関係のある検査であるから、他のいずれの検査よりも正確に、しかも迅速に行なわれなければならない。しかしわが国では医師にしても技師にしても輸血検査の教育が十分に行なわれているとはいいがたい。輸血検査を病院側で行なわずに民間血液銀行のサービスにまかせているところが多いのではなかろうか。このように誤った形で輸血検査が行なわれている原因の一つは、医師が輸血検査をよく理解しておらず、ひどく面倒なものと思いこんでいるからである。

このようなときに徳永栄一博士の「輸血検査」が出版されたことは、まことによろこばしいことである。徳永博士は永年日赤中央血液センターで輸血検査の実務に従事され、現在同センターの副所長の要職におられる。したがって、僅か38頁のこの本の中に実際に必要な事項が非常に

要領よくまとめられている。

この本は初心者を対象としたものであって、輸血における血液型の意義と血液型抗体の簡単な説明およびA B O式血液型、Rh 式血液型、交差試験の説明と検査術式の解説から成立っている。交差試験としては血清法とプロメリン法が詳しく説明されており、クームズ法は簡単な説明に止められている。

この本の特徴は第一に検査術式を写真を用いてていねいに説明しているために、文章では表現し得ない微妙なこつが会得できることである。例えば交差試験などでは試験管の配列の仕方によって、検査の迅速度と正確度が異ってくるものであって、とかく初心者は原理はわかっていてもその辺のこつがわからず、検査が遅い上に材料の入れちがいをやり誤判が多いものであるが、この本では写真によってそのこつが労せず

して覚えらるようになっている。

第二の特徴はその説明が著者の永年の経験から出ているものであって、真に实际的であるということである。例えば約2%の血球浮遊液を作るときには、約1mlの生理食塩水に血液1滴を加えればよいという具合に実際に即した説明がなされている。

この本は初心者向きに書かれているがAm またはBmの検査法、Dの検査法、交差試験の問題点なども説明されており、これまでに輸血検査をやって来た人達にも参考になる点が多い。

ただ欲を言えば、交差試験を行なって凝集あるいは溶血が起こった場合のその後の検査について、方針だけでも説明していただくと、さらに便利なものになったような気がする。しかし初心者を対象にしているこの本に、そこまで望む方が間違いないのかも知れない。

輸血検査をこれ程にわかり易く解説した本は他にないと思う。技師のみならず医師や医学生にもぜひ読んで欲しい本である。そして輸血検査に対する正しい認識を持って欲しいものである。

B 5 判・頁43・写真42・¥680・〒60

 医学書院刊
